

## 地域企業・産業資料デジタルアーカイブについて

- (1) このデジタルアーカイブは、東京大学経済学図書館が所蔵する地域企業・産業資料のうち、印刷物および近代の文書類について順次デジタル化をすすめているものです。
- (2) このデジタルアーカイブの利用に際しては「[東京大学経済学図書館電子資料利用規則](#)」に同意したものとみなされます。
- (3) 印刷物など他媒体への使用については、東京大学経済学図書館までお問合せください。
- (4) 画像は白黒です。画像の撮影には文字が視認できるよう十分な注意を払っていますが、資料の欠損、変色、褪色等の劣化や、ノド部分の状態によっては、原本の文字が全て写っていないものがあります。これらについては資料の原形を保ちつつ、出来る限りの範囲で撮影したものととして了解下さい。写りの悪い資料については、東京大学経済学部資料室にて、所定の手続きにより原本の閲覧をお願いします。
- (5) 本アーカイブに関する質問等については、東京大学経済学部資料室までお問い合わせ下さい。
- (6) 本デジタルアーカイブの一部は、独立行政法人日本学術振興会平成 27 年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）課題番号 15HP8021 の交付を受けて作成しています。

(111) 一物生微黨酒黨甘一

るが、兎も角一〇%のアルコール液ですべての生活細胞が害せられることはランベルが種々の動物によつて實驗してゐる。ところが砂糖の害の方は、酒害に比して説かれたことが甚だ妙い。胃を悪くするとか、むし歯の原因になるとかの程度で、酒害が多く攻撃的に立つて来たのに較べて、甘黨は文字通り甚だ甘やかされて来た観がある。

しかし近頃の營養學上の研究では、砂糖の害はさういふ輕少の程度のものではないらしい。砂糖を過食すると、血液が酸性となつて全身に種々の障礙を及ぼす。血液酸性化の問題は説明すれば長くなるが、要するにアルカリ性を正常とする血液が反對の酸性になるのであるから、胃とか、むし歯とか云ふ局所的の害にのみ止まるものでない事は諒解しなければならぬ。小學生で大甘黨と、小甘黨を區別して身體検査してみると、大甘黨の方は大部分體格丙で、學業の成績もよくない。骨格の發育が悪く、従つて齒も不良である。近頃は結核に罹る者も多數は甘黨であるといふ報告も出てゐる始末、婦人では妊娠しても胎兒の發育が悪く、お産も難くすまないといは

れる。鼠も三〇%の砂糖の入つた飼料で飼ふと、衰弱してぢきに死んでしまふのである。

二つの毒を消すもの

さて、叙上の酒の害、砂糖の害を防ぐにはいづれも或る程度までは無害で營養價を有してゐるのであるから、節制して有害量を超えないやうにすることが因より望ましいに違ひはないが、一朝一夕にさうも行きかねるとすれば、有害量を超えてもその害毒を起させない方法を講ずることも必要である。ところが其處で思ひ出して頂きたいのは、酒を作るもとなる酵母である。これは糖分の中に繁殖する點から見れば、甘黨の旗頭であつて、砂糖の害を受け難い素質を備へてゐるに違ひない。同時にまた酒に對しても強い性質を持つてゐる筈である。

ところが實驗して見ると、酵母の體內には砂糖の害を消す成分、酒の害を消す成分が濃厚に含まれてゐるのである。前に述べた三〇%の砂糖を含む飼料で鼠を飼ふ時に、これに僅かに一%の酵母を加へれば障礙が起らず、三%を加へれば殆んど完全に發育するのであ

る。酒においても同様で、鼠に毎日酒を人間にすれば一升酒といふ程飲ませると、段々衰弱するが、やはりこれに酵母を飼料の四%加へると、酒の有害作用が現れず、むしろ普通よりも發育がよくなつて来るのである。これは理化學研究所の井上博士が詳細に實驗報告せられたところである。

この酒の害、砂糖の害を消す物質はビタミンB複合體といはれ、胚芽や糠の中には妙いが、酵母の體內に最も豊富に含まれてゐるのである。有效な數種の「錠劑わかもと」が、酒前酒後を綜合した「錠劑わかもと」が、酒前酒後に服用することによつて、悪酔、二日酔から免れしめる效あることは、従來酒客や酒席に侍んべる女性達に知られてゐるが、その根據は茲にあつたのである。同時に砂糖過剰から來る血液酸性化の害毒即ち骨格の薄弱、齒牙の不良、胎兒幼兒の發育不良、妊娠、産褥の障礙等、廣汎な一種の營養不良と見られる健康の低下に對しても、この「錠劑わかもと」が有効であるのは學理上當然のことである。

「錠劑わかもと」三百錠一圓六十錢、一千錠五圓、全國藥店にて販賣す。

# 技術家登庸論

倉橋 藤 治 郎

永らく文筆から遠ざかつてゐる私に、「技術家登庸論」を書けと云ふのはどうした風の吹き廻しなのか。編輯者の言ふ所によれば、「現在、重工業中心時代に於て、技術家の地位は非常に重要になつており、今後益々重要視され、旺んに登庸される様になると思ふ、それについて論評せよ」と云ふのである。さう云はれれば私が何とか云ふより致し方がない命題でもある。

一體、技術家とは何か。廣義に云へば、明治以後の智育偏重教育を受けた日本人は、皆技術家である。法科は法律技術、政治科は行政技術、経済及商科は経済技術、以下農業技術、工業技術、醫療衛生技術を養成し、文科でさへ大多数は教育技術を養成して来た。大生以下擧世酒々として智育偏重の職業教育により、術と腕との職業人、即ち技術家を製造し、歐米物質文明の列に比肩する急テムボの進

歩を遂げたのが、明治以来の學校教育の長所であつて缺點である。此教育方針が數十年續き、二代乃至三代に及んで、今日では先づ日本人と云ふ者の大部分が技術家乃至技術家的になつてしまつた。あらゆるものが自由に取入れられ、消化され、應用され、着々と文明開化になつて行くのは、此技術家萬能時代であるからである。

同時に、今日精神教育が叫ばれ、教育制度の再吟味の論ぜられるものが爲である。日本人は餘りに技術家的になりすぎた。桐口ではあるが、粒が小さくなつた。官民到る處、事務と所謂技術とを問はず、皆是れ一様に好技術家である。然し結局夫れ以上のものてなくなつた。

だが、編輯者の意圖はこんな廣義な處にはあるまい。そこで少し

焦點を縮めて見ると、技術家と云ふ文字は、農業、山林、蠶業、獸醫、衛生、工業、電氣、通信、鐵道等、自然科學の應用に従事する人間の事、俗に事務屋に對する技術屋である。

所が此意味に於る技術家が、いつまでたつても技術家又は技師、技手であるに反し、事務家は年と共に脱皮して、實業家になつたり、政治家になつたりする。技術家の中で皮を脱がうとすると、或は本人は脱いでしまつた積りである、あれは技術屋だと言つて評價してしまふ。

テゴリを飛越える事は、不文律としてやらなかつた。最近人事で最不評判だつたのなども、つまり此カテゴリの中の其の又「欺項目」の「目」位の中から何でも彼でもすくひ上げようとするからである。

技術家登庸論と云ふのは此邊から出て来るのであらう。登庸論と云ふからには今迄登庸されてゐない事である。事實又されてゐない。登庸しもしなかつたし、又出来もしなかつた。民間ではまだしも、官吏は文官任用令と高等文官試験として、出世人種と非出世人種とに判然區別されたのが明治の藩閥官僚政治時代、爾來政黨が華やかならうが、軍部が押出して來様が、此方針には狂ひがなかつた。

東大法科四十二年出身と云ふのは、有名な人物揃ひとなつてゐる。或日曜或俱樂部の閑散な食卓で、某々前大臣等と某々四十二年秀才等と雑話の末、某前大臣の四十二年組禮讚となり、指折り數えで行くと成程出世してゐるのが多い。中には又人物もある。其邊迄はよかつたが、調子づいて二十人、二十五人と數え出すと中々、えらゐのが出て來る。私が思はず「成程さうなつて來ると四十二年ちうのはえら物揃ひだね」と云ふと、皆吹出しておしまひになつた事がある。然しそんなのでさへ四十二年法科出て金魚の養の末端にながつて居ればこそ、兎にも角にも知事、市長、社長、代議士になれるのである。

今はなくなつたかも知れんが、各官廳には學士名簿があつて、卒業年次によつて省内在官學士の名が列記されてゐる。最近或はなくなつたかも知れないが、精神方針に變りはない。其學士と云ふのが法經商科迄、且つ官立に限る事である。立身出世と云ふも此表中の人間からのやりくりで、其他は全部山の賑わひになる枯木の類である。表中になければ世間から法科出の人間を探す迄であつて、此カ

大正の半ば頃、農林及工業關係官廳技術家を中心とする一團は、文官任用令を改正せよ、技術關係部局長官は技術家を登庸せよと叫んで、可成り活潑な運動を起し、水平運動團體として工政會、農政會、林政會、醫政會などと云ふのが續設され、或官廳では夫等團體の會員を黒表に印し、又或技術官吏は夫等の團體の役員にされる

なら退會するなど云ふ、笑へない悲劇があつた。何縣土木課長がやめられて事務官が課長になつた。三菱で七人の技術家重役が誅首された。其度に委員、役員が押問答に出掛けたが、皆適當に挨拶されて引下り、歸つて來てから憤慨するに止まつた。

根本は官房人事である。人事は法科で握つてゐる。外へ出た時はもう遅い。よしどうあらうともオインレと引込められるものでない。人の好い技術家はそんな事に頓着なく、今日でもまだ時々建議や決議を繰返してゐる。最近も近衛首相に對して建議をしたらしい。

私も此運動の渦中に片足捲込まれてゐないでもなかつた。深く技術家の境遇に同情しながら、目の付けどこの低い事、見當の違つてゐる事、運動のまづい事を氣の毒がらざるを得なかつた。そんなにおちめられて頭が上らないならサツサとやめたらどうだと、つい例によつて簡単に片付けたくもなかつた。技術家だけの水平運動ではなく、門戸開放、機會均等、人材登庸の大旗の下に、なぜ大同團結が出来ないのかと問ふても見た。

文官任用令改正まではよい。技術部局長を技術官にしてくれと云ふのは、法科側を農工科側にしてくれ、大きい閥を小さい閥に替えてくれと云ふ事でないか。現に君達工學士、農學士の下にそれこそ絶對に陽の目も射さない専門學校、中等學校出の農工技術家がある

ではないか。法學士一部の地位を工學士農學士がねらへば、明日君等の地位を脅かす者は君等の下の技師技手ではないか。

そんな低い所を目をつけず、是元の見えない眞似をせず、技術家の職官運動に限局せず、官公私學と分科とを問はず、廣く門戸を開放し、人材の登庸をし機會均等ならしむ事、一に五ヶ條の御誓文の御精神によつて堂々とやつてはどうか。官僚一部の行動は明かに五ヶ條の御誓文の大精神に戻つてゐるではないか。それがどうしても通らなければ、役人だけが御奉公でない。役所は皆法學士に頼んでおいて、君等は皆やめてしまひ給へと云つたが、議論の立場も規模も全く違ふので、私は手を引いた事であつた。

然し文官任用令の改正、従つて高等文官試験科目の改訂と云ふ事は是非断行する必要がある。確か加藤内閣だつたかと思ふが、斯様な線に沿つて改正をやらうとした事がある。其時或關係から試験科目に何々を追加するか、具體的に考へてくれと云はれて考へて見たが、必須科目は動かさず、選擇科目を廣く取入れるとして拾ひ上げて見ると、農業、商業、醫學、教育などは何れかと云へば總括的な一、二科目で括れる。困つたのは工業で、工業には原論、通論がない。又工業經濟、工業政策は工科的でない。と云つて技術的に縦割して機械工學、電氣工學、化學工學、建設工學と羅列する譯にも行

き兼ねると、彼是云つてゐる内に改變ておじやんになつた事がある。

試験で行くか、試験をやめて自由任用で行くかと云へば、勿論人材を廣く自由求めて行くでなければ、すぐ行詰りを生ずるはきまりきつた事である。革新と云つても何と云つても、結局は人事である。人間の社會に於て人事が沈滞すれば、他は凡そ無意味に近い。

殊に此門さへはれば、一路坦々、馬鹿でもジョンでも本殿に昇れる。此門を潜つて來なければ、大臣か代議士によりなれない。と云つて大臣は數少なし、又大臣も相當に門に關係があり、近頃の代議士ならなるに及ばぬとあつては、此門人材登庸の門をなくして人材閉塞の門であるに於て、此高等文官試験程、基礎的に國家に害してゐる制度はない。通れる者は早業の神經質の才走つた、云はば人生御破算にして六、七十點から精々八十點程度の人間である。晩成の大物など譯なく跳ねられて終ふ。まことに困つた制度である。

近頃の日本人の様に、何でも彼でも近衛にばかり物を注文して見ても、近衛一人で何も出来るものでもないが、之だけは一應注文して見てもよくないかと云ふ氣もする。

出來なければせめて任用令の大改正をやるんだが、之さへ中々重荷だらう。

○

然し編輯者の課題の眼目は、こんな廣い意味の技術家でもなく、更に狭く工業技術家と云ふ意味にあるらしい。重工業中心時代に於いて技術家の地位が非常に重要になつたと云ふのを見れば、編輯者の目的は工業技術家登庸論にあるものと思ふ。又事實世間で技術家と云へば大體工業技術家を指すと云つても差支えない。實際問題として、數に於て、社會的重要性に於て、工業技術家が技術家社會を代表すると云つても宜しい。

工業技術家は登庸されてゐるか。登庸されてゐる。今はなくなつたが樞密顧問官の古市公成、鐵道大臣や滿鐵總裁をやつた仙石貢、貴族院議員だつた斯波忠三郎など、生きてゐる處で、貴族院では研究會の大久保立、井上匡四郎、八田嘉明、公正會の大藏公認、明大の大河内正敏、前商相の伍堂卓雄、現鐵相の中島知久平も海軍副大尉で技術將校出である。實業界では三井系に帝燃總裁の收田環、三菱に重工業會長の斯波孝四郎、日産の野口遵、日産の鮎川義介、日曹の中野友禮など、滿洲では滿鐵副總裁の大村卓一、滿洲國國道局長の直木倫太郎と數え上げて來ると、相當な人物が工科出の技術家にもゐると云へる。

だが、此連中が法學士であつたらどうか。かり迄はなつてゐなかつたか。それとも之以上になつてゐなかつたかと云へば、勿論工科出身の爲に大體は損をしてゐる。さう云へば此連中の中には負け惜しみを

云ふのもあらうが、公平に云つて損をしてゐる。殊に此れつ切りの人数の中でも、随分門閥家柄で優先的條件の下にある者も少なくない。とすれば、工業技術家を押通して此處まで来た云ふのは、まことに寧々たるものである。

技術家の爲に損をしてゐると云ふ様な例は幾つもある。鐵道省に黒河内四郎と云ふ工務局長があつて、人物も大きく、格幅もよく、工學博士の學位もあつて、局長より次官、次官より大臣に向く男で、鐵道大臣にしても今日の大官の中軸以上に行ける人物で、評判も上下によかつたが、今は高速度鐵道の取締役技師長などやつてゐる。誰ももう一度返り咲を骨折る人間もないと見える。其邊技術家は人が好過ぎると、世渡りにまづいゝとて、人事行政の機微に觸れてゐないから、役人と民間とを交互に泳ぎ廻つたり、友達に運動して貴族院に納まつたりと云ふ様な藝が出来ない。逓信省工務局長の堀井剛にしても、あれだけの大異動があつて、後輩が二代位次官をやつてゐるのに、技術家だからいつも圏外におかれてゐる。次官位は充分に踏める人物である。内務省の萬年課長の高野六郎なども、やつと厚生省が出来て局長である。内務省の土木の技術家と云ふのは、いつも技術家水平運動の中心だが、この技師で宮本武之輔などは、人物もよし學識もあり社會常識も相當に發達してゐる、工學博士で東大教授を兼任してゐるが、法學士ならつきの昔に局長で

あり、多分次官になつてゐるだらうと思ふが、課長にもならない。鐵道省建設局長の平山復三郎も頗りなる立派な人物だが、多分次官は六ヶしいのではないと思ふ。右はちよつと思ひ付きたから、外に探し出せば幾つもあるだらう。

死んだ長尾半平はよく法工(方向)の間違ひとしやれて人を笑はせたが、法工の間違ひがかう立身出世の妨げになつては、出世が樂しみの役人が腐るのも無理はない。學生時代には何れかと云へば頭のよいのが工科などへ行き、出來の悪いのは止むを得ず法科へはいる例も少なくない。所が出て見ると當年の秀才は平技師で、當年の悪いのが長官である。技術家は天職を樂しめとか、世間的慾望を起すとか云つて見ても、大抵は凡庸俗物なのだから、さう仙人か世捨人の様にも悟り切れない。それも相當な人物なら兎も角、ロクでもない法學士が先引き後押しして出世して行くのを見ると、クヨクヨするの止むを得ない。と云つて工科出の技師がさうえらいと云ふのではなく、之も大抵は規格統一のレディーメイドだから、法と工とを取替えて見ても、これと云つてよくならうとは思はぬが、どうで大した代物は双方ともないのなら、又案外世間に大物がボツとして魚でも釣つてゐるかも知れないとすれば、門戸だけは開放しておいたらどうか。技師が局長次官になつても別に目立つてよい事もあるまい。然し又かう

組織制度が行届いて来ては、別に大して失敗もあるまいとすれば、技師でも私立出ても中等學校出ても、樂に人物を簡拔登庸出来る事にはしておかないと、實際困る事が出来る。

之は役人に例をとつて云つたが、政府は最大の組織で代表的のものだから、民間も凡そ其の通りである。

同時に、技術家も出世と云ふか登庸と云ふか、され様と云ふのなら、もう少ししつかりやらねばいかん。獨りて色目を使つて腰のあたりをモヂ／＼させてゐたんで、出世がしたいのか小便がしたいのか、此のせわしい世の中ではサツパリ見當がつかん。どうで君達のやつてゐる事も、法科出の連中のやつてゐる事同様俗事なのだ。へんに行なひ濟まらず、出世も金儲けもよからう。それならそれでもつと態度をほつきりしなければだめだ。

法學士が出世の爲にあらゆる手段を採る事は實に到れり盡せるものである。遊泳術と云ふか立身出世術と云ふか、親分は自分の爲、自分は親分の爲、朋輩同志は仲間の爲、大體としては學閥擁護の爲、あらゆる方法を講ずるし、又外に取り柄のない男でも此道にかけては實によく努力もする。其代り出世の爲に仕事や何かを犠牲にする事は何とも思つてゐない手合がある。一年に二度三度轉任して平氣など、吾々の常識では判断が出来ないが、出世の爲なら恬然平然

としてゐる。勿論決してほめた事ではない。役所の仕事が一向捗どらないのは、役所が大部分法學士の出世のたらい回しの舞臺に利用され、仕事本位になつてゐない爲である。が此人口過剰の日本で、出世でもしようと云ふには、餘程厚顔無恥の上に尤もらしい面を被つて、エグツク押し出さねば出来ないものらしい。

よく履歷は相當なものだが、少し脳味噌の不足な様なものが、其處らあたりのクラブなどにゴロ／＼してゐる。あれは何をしてゐた男かねと尋ねる人に、さア出世ばかりしてゐた男だらうと答える外ないのがある。所が此の出世の出し見たいな男等が、政變とか何とかなると相當活潑に動いて、ともすると何か有つていて、やがて大きい自動車で乗り付けるんだから世の中は不思議なものだ。出世と云ふのは確に一つの術だね。尤もこんなのが死んだ時、隱亡が引出したら骨がなくて辭令だけ残つてゐたさうだね。

技術家よ、君達には此處までの鐵面皮はあるまい。自分で自分の出世を誘導促進する事は、とても君達に當分出来ない。精々が先輩に見出されて拾ひ上げられるのを待つ外ないだらう。結局、技術家登庸論の正體は、技術家も今迄よりは六分割のよい役割がつく。生産力擴充だ、滿洲だ、北支那だ、となる足らないのは先づ技術家、全くそれらもので、濱口内閣の消極政策で隨分敵になつた技術家が、一昨年あたり迄に皆復職してしまつて、今日で



のが、所によつて一足飛びに鍛冶科になつたり、木工科になつたりして、國民教育に於る加工生産行爲の概念を授けるのでなくして、あれば皆補習學校まがひの職人教育になつてゐる。

こゝに謂ふ工業學乃至工業通論は勿論工業經濟、工業經營、工業政策ではない。と同時に工業技術大意でもない。兩者の綜合であり通論である。工業と云ふ加工生産行爲其ものを丸彫りにするものである。ざつと云へば、工業の意義、工業の種類、工業の發達、工業の分布、工業の要素、工場、原料、機械、燃料及動力、經營、技術、勞働、資金、金融、工業教育、工業所有權、工業政策、夫れから各論に入つて土木、建築、交通運輸、機械、電氣、採掘冶金、化學工業、纖維工業、工藝、雜工業と云ふ風になるものだらう。工業が人文科學と自然科學の應用性を均分にもつてゐるに鑑み、經濟に偏せず、技術に流れず、工業其ものを縱横に説明すべき性質のものがある。

お前の云ふ様なものは、何處の國でやつてゐるか云はれると、實は困つた事には何處の國にもない。私は一時隔年毎に歐米へ國際會議に行つてゐた。行く度に此問題に就て意見を交換して見たが、結局纏まつたものはない。それがなくてお前達はどうして教育してゐるか、それが何より工業教育の根本的缺陷じやないかと

云ふ事だけは皆同意させた。

何故それでは工業學なくして物理學、化學、數學、地理、歴史から一足飛びに電氣、機械、化學工業と工業の中の専門に分科してしまふか。即ち今の世界の工業教育は皆普通學の上に工業の専門科目がぢかに乗つ懸つてゐて、工業の各専門分科の共通基礎となるべき工業學乃至工業通論がない。従つて電氣は知つてゐるが工業はどんなものか知らない。工業と云ふものはよく知らないが機械は知つてゐるなどと云ふのが出て來る。だが工業教育の根本的缺陷で、技術家非當議論も、彈き盡り無用論も、第一は此邊に理由があるのだが、そこでなぜさうなつたかと云ふ原因を、私は歐羅巴で調べて見た。其結果、工業教育と云ふものは、つまり歐洲中世紀の徒弟教育に端を發し、之に數學、物理學、化學が加はり、複雑高級となつたものである事、即ち元來が徒弟職人の教育で、親方主人の教育でない爲め、唯技術的のみに高級化して、遂に工業大學となり或は綜合大學中に取り入れられたと云ふ進化の経路が判明した。

歐洲も、従つて米國も、其長い歴史になづんで、一向之を反省する機會がなかつたと云ふ譯である。工業教育の改善も、技術家の頭を鑄直すのも、之れからだ云ふので、其頃無暗に多忙な中から「工業通論」を、止むを得ず私自身を書き出した。其事を聞いて中央大學から、又續いて明治大學から、

商學部で其講義をしてくれと云ふので、夫々三、四年やつたか、何しろいそがしいので何時の間にか兩方とも止めてしまつた。それから、法學士を一人助手に入れてテキストを纏めかけたが、何だ彼だと世話焼きが多忙で今だに出來上らない。テキストをもつて歐米へ三度か行つた、少しは旅行中に出來るかと思つたので今一部の原稿はメキシコ市の私が事務をしてゐる會社の机の中にある。然し之は或は私のお墓の代りになるのじやないかと思ふので、なるべく早く此の難然たる生活を切上げて纏め上げてしまひたい。出來たら英譯して、各國の工業界と教育界に問ひたいと思つてゐる。

つまり工業教育は、普通學の上に工業學又は工業通論、法制經濟、力學其他基礎工業、機械工業大意、電氣工業大意、化學工業大意、建設工業大意、と來て、それから後半期に入り分科して現在の各科になるべきである。然るに今工業教育と稱せらるるものは、全部純然たる専門技術教育であつて工業家教育でない所に、技術家の差別待遇もあれば、技術家の水平運動も、技術家登庸論も起る。


**冬**

太陽が遠ざかり  
紫外線が少くなり  
栄養が不足する



知らず( )の中に、栄養が固  
しかり肝油は生臭いものと油量が多  
いため過度に服用を禁絶されたも  
のです。今日では大豆大の小  
粒が一盃の肝油或ひは十餘個の球  
に相當するA.I.を含有するハリパ  
が出来て、一日三四粒、不快な  
臭味なく、胃腸にも障らず、何人  
も樂々と服用し得ます。

かやうなとき第一に推奨される保  
健剤は肝油です。皮膚や粘膜の自  
衛力を強化し且つ視力の減退を防  
ぐに必要なビタミンA、D、太陽  
の光の代りとなるビタミン  
Dとを濃厚に含有するからです。



技術家登庸論は結局工業教育再組織論から出直すべきである。それじや暇が、つて當座の間に合はぬとすれば、教育の如何に拘はらず、人物の出來てゐるのを、カテゴリーに拘泥せず登庸山崩抜するなら、今日の今からでも樂々と出來るし、又實際、技術家と云はず、近衛さん並に官民各方面の先達諸君、いつまでも、お池の金魚ばかり探してゐないで、門戸開放、機會均等、人材登庸の大旗を樹て、大海から鯨でも獲てもつかまへて來る氣は起らないものだらうか。私達には其狭い量見が腑に落ちないのである。

## 新英雄主義と次代の世界観

山崎 謙

資本主義下の諸國民は、政治の信據をば、多少あれこれと論議はしながらも、従来は結局、議會に求めて来たのである。しばしば近代とデモクラシーとが一つ過程において考へられたのも、偶然ではないのである。

しかるに昨今、議會に對する民衆の信用は、いづれの國においても、頓に著しく失はれかけてゐる。その代りにそして、議會を超越する偉大な政權が憧れられてゐるやうに見える。われわれの國でも、ここ暫くのみだ、政變のある毎に謂はゆる「強力内閣」を要望する聲が漸く里耳に入り出した。つまり、議會に氣を奪われる内閣でなく議會に命令するやうな絶對的政府の成立が、換言すれば英雄的な權力主體の出現が、常はれ始めたのである。

さてにイタリーやドイツには、さうした英雄的權力主體が國民の頭上に樹立されてゐる。ひとも知ることく、イタリーのそれはムツソリニと共に有名なファツショであり、ドイツのそれはヒットラーと一緒に名高いナチスである。その他、これらのものと本質において同一な政權の母體は、スペインにもフランコ將軍の力で打ち立てられたし、ブラジルにもゲアルガス大統領の手で建設された。フランコ政權が日獨伊の三協定國によつて正式に承認されるまでに進展したことは先づ報せられたところからも明らかであるが、ゲアルガスの政權も組合法によつて此のほど甚だしく獨裁的に強化されたのである。なほまた最近、フランスにも、フランコ流の英雄政治を目指す軍閥式の大仕掛な右翼陰謀が企圖されたと傳へ